

全 12 項目で上位評価 (S・A) の割合が大幅に増加し、生徒の能力向上が顕著に表れた。特に「研究遂行力 (③④)」や「伝える力 (⑩)」では、A 評価以上の割合が約 40～60%に達しており、主体的・対話的な学びの成果が見て取れる。一方で、科学英語運用力 (⑪⑫) は他項目に比べ改善の余地があり、今後の継続的な重点指導が求められる。

## 8 考察

疑問力、アプローチ・戦略、計画実行力が 10%から 40～60%へと大幅に向上したことは、生徒が主体的・組織的に探究活動を推進する力を身に付けたことを示している。一方で、英語の読み書きおよびデータ分析力の自己評価が他と比較して伸びが限定的な事実は、探究のレベルが既存スキルの活用から学術的スタンダードを意識した本格的な研究へと移行したことによる、評価基準の厳格化(メタ認知の深化)を示すものと言える。

## 9 今後の課題

全体的な能力向上はみられるものの、今後は「評価の二極化の解消」と「科学英語運用力の底上げ」が重要である。多くの項目で下位評価 (C・D) が一定数残留しており、個々の習熟度に合わせた個別最適化された支援が求められる。特に、高度化した探究水準に対応するため、専門的なデータ解析手法や学術的英語表現の習得に向けた実践的スキルを補っていくことが不可欠である。自己評価の厳格化を「成長の伸び代」と捉え、ALT の助言や海外校との交流、ICT ツールの活用を通じ、高まったメタ認知を具体的なアウトプットの質的向上へと結びつけることが肝要である。

## 10 年間計画

回	月日	リサーチ	講座内容	
1	5/1	オリエンテーション	探究活動導入講話	
2	5/15	先輩に学ぶ会	3-Eによる英語科また課題研究内容についての発表	
3	5/22	グループリサーチ 1	SDGs ボードゲームを使って SDGs 概念を学ぶ	
4	5/29		学園大学との第 1 回交流会に向けて、留学生の出身国について調べる	
5	6/5		上記の続き。調べたことをスライドにまとめる。調べている国と日本の違いにも目を向ける。	
6	6/26		英語でスライドにまとめる。プレゼンテーション準備	
7	7/3		交流会準備。班ごとにアイスブレイク、自己紹介を考える	
8	7/7		留学生との交流会 (1) (本校にて) 発表① (グループ内)	
9	7/10		発表② (クラス)	
10	7/24		1 学期の振り返り。英語科合宿で発表するプレゼンテーション準備	
11	9/4		合宿で発表するプレゼンテーション準備	
12	9/11		合宿で発表するプレゼンテーション準備	
13	9/18		合宿で発表するプレゼンテーション準備	
14	10/2、3		英語科合宿	英語科合宿 (発表③)
15	10/6		グループリサーチ 2	留学生との交流会 (2)
16	10/9	「Kumamoto and Me」に関するテーマ設定		
17	10/23	リサーチ、Research Question を考える		
18	10/30	Research Question、スクリプト作成		
19	11/6	留学生との交流 (3) (熊本城にてフィールドワーク)		
20	11/13	発表資料作成、発表準備		
21	11/20	スライド作成、プレゼンテーション準備		
22	12/1	留学生との交流 (4) 及び発表④ (熊本学園大学にて)		
23	12/11	ルーブリック、アンケート		
24	12/16	評価。発表⑤		
25	1/9	グループリサーチ 3	KUMAKITA TS 法でグループ研究のテーマを検討	
26	1/15		KUMAKITA TS 法でグループ研究のテーマを検討	
27	1/22		KUMAKITA TS 法でグループ研究のテーマを検討	
28	1/29		KUMAKITA TS 法でグループ研究のテーマを検討	
29	2/5		KUMAKITA TS 法でグループ研究のテーマを検討	
30	2/26		KUMAKITA TS 法でグループ研究のテーマを検討	
31	3/18	SSH 成果発表会	SSH 成果発表会発表及び見学	

# 事業名 アドバンストリサーチⅡ (ARⅡ)

学科:理数科

学年:2 学年

期間(日時):通年(毎週月曜 5、6 限目)

担当者:田尻

## 1 目的

自己の在り方や生き方を考える活動をふまえて、課題の設定や探究活動を行うことで新規の知見を見出し、SSH 事業で育む資質・能力の育成を目指す。

## 2 仮説との関係、期待される成果

課題発見力、研究遂行力、データ活用力、科学的表現力の向上が期待できる。

## 3 昨年度(これまで)の課題

英語科との連携事業の継続や発展を進めることに加え、普通科との連携事業を立ち上げることで課題研究の深化を進める必要がある。

## 4 今年度の具体的目標

練り上げたテーマについて課題研究を行い、各学校行事や外部コンテスト、英語科や普通科との学科間連携を含む多様な発表により生徒のモチベーションを維持して課題研究に臨み、SSH 事業における資質・能力を高める。

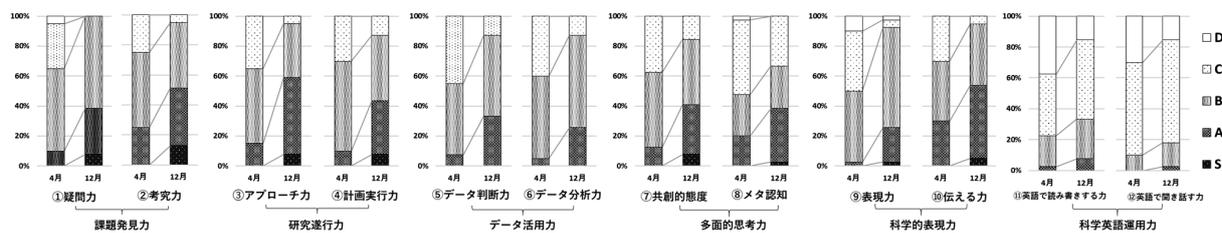
## 5 取組の内容・方法

11 月の熊本県公立高等学校理数科研究発表会を中間目標に、3 月の SSH ハイブリッド型成果発表会を最終目標に設定してグループでの課題研究を行い、めざす資質・能力や主体性を育成する。また、校内での協働を意識して、5 月、6 月、12 月に英語科との合同授業の設定、12 月に 3 科合同ポスター発表会の実施など校内での学科連携コラボレーションを促進する。

## 6 育成する資質・能力及び支援体制、評価・検証

内容	ARⅡで育む資質・能力					
	課題発見力	研究遂行力	データ活用力	多面的思考力	科学的表現力	科学英語運用力
	◎	◎	◎	○	◎	○
1 学期	◎	○	○	○	○	
2 学期	◎	◎	◎	○	○	○
3 学期	◎	◎	◎	◎	◎	
支援体制	SSH 研究部職員が統括し、物理、化学、生物、地学、数学の教員が研究支援を実施する。校外調査や外部連携、物品購入などを課題研究支援スキームにより支援する。					
評価検証	論文等をルーブリックによって評価する。この評価やアンケート結果の解析を基に、資質・能力の向上への効果を分析・検証する。					

## 7 取組の成果(第Ⅲ期 KUMAKITA ルーブリック評価)



上記ルーブリックによる生徒の自己評価からはいずれの資質・能力についても大きな伸びがみられ、S、A、B 段階が 80% 以上になっている項目が多い。特に課題発見力と研究遂行力、多面的思考力については、S、A 段階が 40% 程度に伸長している。

## 8 考察

2 年次には、全班が GRⅡ との合同研究報告会、中間発表会、北陵祭(文化祭)でのポスター発表、3 科合同ポスター発表会と多数の校内発表会、九州工業大学や KSH 主催の外部発表会などの外部発表会にも参加する機会があった。意欲的に課題研究に取り組み、班員が協力した成果が課題発見力、研究遂行力や多面的思考力を伸ばした要因と推察できる。また、先端科学研修で大学研究室訪問や JAXA の施設見学を通して自身の興味・関心を高め、課題発見や多面的思考の必要性を高めたことも寄与した。さらに GSS、GRⅡ、ARⅡ の 3 つの学校設定科目で連携した GRⅡ-ARⅡ Co-Creation Lesson では英語科と理数科

の強みを補完でき、3 学科合同ポスター発表会では普通科も含めた発表や質疑応答により、互いに研究意欲を高める機会が得られるなど、校内の学科間コラボレーションが充実し、有効に働いた。校内中間発表会では外部から審査員を招き、質の高い研究に寄与した。このような取組から、研究内容の充実も目覚ましく、今年度、県公立高等学校理数科研究発表会にて AR II 化学班が最優秀賞を受賞し、次年度の中国・四国・九州地区理数科高等学校課題研究発表会ステージ発表部門に出場することが決定している。

## 9 今後の課題

校内の教育資源を有効に活用するためにも英語科との連携事業を継続し発展させ、学校設定科目 GSS との連携を強化することで、さらに科学英語運用力の育成に努めたい。2 年次に KSISF の運営を英語科の生徒と協力して行った経験があり、英語でのポスター作成や発表を行う 3 年次での AR III や KSISF に繋げたい。普通科との連携事業も継続・発展させ、さらなる課題研究の深化を図りたい。

## 10 年間計画

回	月日	講座内容
1.2	5 月 12 日	オリエンテーション (ループリック説明、SSH 事業説明、AR II の概要説明、課題研究の意義)、KUMAKITA TS 法キャリア編 (AR II と GR II 合同)
3.4	5 月 19 日	研究調査
5.6	5 月 26 日	研究調査
7.8	6 月 2 日	研究調査
9.10	6 月 9 日	合同研究報告会に向けたポスター作成・研究調査
11.12	6 月 16 日	AR II と GR II 合同研究報告会
13.14	6 月 30 日	研究調査
15.16	7 月 7 日	研究調査
17.18	7 月 23 日	研究調査
19.20	9 月 1 日	研究調査
21.22	9 月 8 日	研究調査
23.24	9 月 29 日	研究調査
25.26	10 月 6 日	中間発表会(論文・スライド)・北陵祭に向けたポスター作成準備
27.28	10 月 15 日	中間発表会(論文・スライド)・北陵祭に向けたポスター作成準備
	10 月 17・18 日	北陵祭 (文化祭) でのポスター発表
29.30	10 月 20 日	校内中間発表会
31.32	10 月 27 日	研究調査・シングルポイントループリックを用いた振り返り
33.34	11 月 10 日	県公立高等学校理数科研究発表会
35.36	11 月 17 日	研究調査
37.38	11 月 19 日	2 学年 3 学科合同課題研究ポスター報告会に向けたポスター作成・研究調査
39.40	12 月 1 日	2 学年 3 学科合同課題研究ポスター報告会に向けたポスター作成・研究調査
41.42	12 月 2 日	GR II - AR II Co-Creation Lesson
43.44	12 月 8 日	2 学年 3 学科合同課題研究ポスター報告会
45.46	12 月 22 日	論文作成・研究調査
47.48	1 月 14 日	論文作成・研究調査
49.50	1 月 26 日	論文作成・研究調査
51.52	3 月 13 日	シングルポイントループリックを用いた振り返り・論文修正

## 11 活動の様子



校内中間発表会



GR II - AR II Co-Creation Lesson



3 学科合同課題研究ポスター報告会



# 事業名 ユニバーサルリサーチⅡ (URⅡ)

学科:普通科

学年:2学年

期間(日時):通年(毎週月曜5、6 限目)

担当者:後藤

## 1 目的

自己の在り方、生き方を考える活動をふまえて、課題を設定し、探究活動を行うことで、SSH 事業で育む資質能力の育成を目指す。

## 2 仮説との関係、期待される成果

課題発見力、研究遂行力、データ活用力、科学的表現力の向上が期待できる。

## 3 昨年度(これまで)の課題

URⅡは学校設定科目として4年目を迎える。8講座7クラスを運営する仕組みやパッケージ化された課題研究メソッドである KUMAKITA TS 法の実践・発展させることが課題となる。

## 4 今年度の具体的目標

URⅠで習得した探究の方法を用いて、自らの生き方・在り方と不可分な課題を設定し、他者と協働しながら課題研究を行い、その成果をポスター発表及び論文にまとめ表現する。

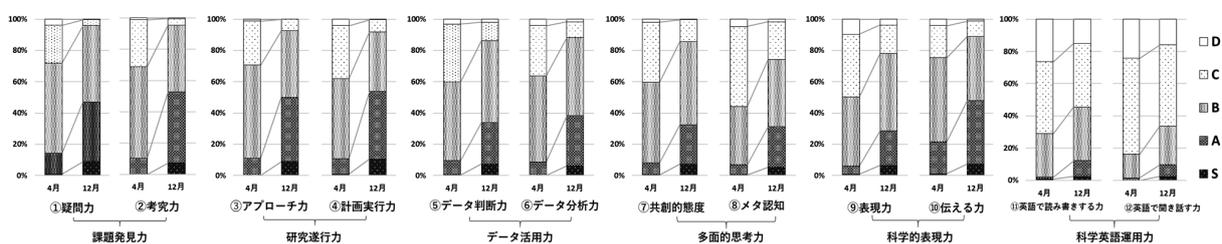
## 5 取組の内容・方法

8分野に分かれて、グループ単位で課題研究に取り組む。研究の記録はオンライン研究日誌(OKN)を利用して行いグループ研究を支援した。ポスター及び論文は、1人1台端末を活用し、Google スライド・ドキュメントを使って統一した形式で作成し、共有ドライブ内にデータベースとして保管した。Google クラウドと併用して、KCL を用いて情報の共有を支援した。

## 6 育成する資質・能力及び支援体制、評価・検証

内容	URⅡで育む資質・能力					
	課題発見力	研究遂行力	データ活用力	多面的思考力	科学的表現力	科学英語運用力
	◎	◎	◎	○	◎	○
1 学期	KUMAKITA TS 法による課題設定の深化					
2 学期	3 学科合同ポスター発表会(中間報告会)					
3 学期	論文・スライド作成、SSH 研究成果発表会					
支援体制	SSH 研究部職員が統括し、PLC を利用して連絡事項の徹底、共有を図る。校外調査や外部連携、物品購入などを課題研究支援スキームにより支援する。					
評価検証	ポスター及び論文をルーブリックを用いて評価する。この評価やアンケート結果の解析を基に、資質・能力の向上への効果を分析・検証する。					

## 7 取組の成果(第Ⅲ期 KUMAKITA ルーブリック評価)



上記ルーブリックによる生徒の自己評価によると、重点育成項目として取り組んだ課題発見力(①②)、研究遂行力(③④)、データ活用力(⑤⑥)、科学的表現力(⑨⑩)については大きく伸ばさせることができた。特に①疑問力、③アプローチ力、⑩伝える力についてはSとA段階で約60%に達したことに加え、考究力やメタ認知などの非認知能力も伸ばした。

## 8 考察

自らの在り方、生き方に合わせた課題研究を行ったことで、本校のSSH 事業で育む資質・能力が伸ばした。特に課題発見力、研究遂行力のS、A段階の割合が大きいのは、1年次に習得した KUMAKITA TS 法のスキルに加え、班での協働、試行錯誤の経験、発表の経験を重ねたことで、理論と実践が結びついたことが要因であると推察できる。

## 9 年間計画

回	月日	講座内容
1・2	5/12	オリエンテーション、KUMAKITA ルーブリック、SSH アンケート
3・4	5/19	1年次までの研究進度把握、担当者との面談
5・6	5/26	研究計画発表会に向けた資料作り①
7・8	6/2	研究計画発表会に向けた資料作り②
9・10	6/9	研究計画発表会に向けた資料作り③
11・12	6/16	講座内研究計画発表会・振り返り
13・14	6/30	研究計画再考、データ収集
15	7/7	研究計画再考、データ収集
16・17	7/23	データ収集、2学期の活動計画案
18・19	9/1	研究計画の確認、データ収集
20・21	8/30	データ収集
22・23	9/8	データ収集
24・25	10/6	データ収集
26・27	10/15	データ収集、シングルポイントルーブリックを用いた担当者との面談
28・29	10/20	データ収集
30・31	10/27	データ収集
32・33	11/10	データ収集、ポスター作成
34・35	11/17	データ収集、ポスター作成
36・37	12/1	データ収集、ポスター作成、発表練習
38・39	12/8	2学年3学科合同課題研究ポスター報告会
40・41	12/22	報告会振り返り、ポスター訂正、KUMAKITA ルーブリック、SSH アンケート
42・43	1/14	論文作成
44・45	1/26	論文作成
46・47	3/16	1年間の振り返り、成果発表会に向けた発表練習

## 10 特色ある取り組み

3年目となるPLCの運営については、講座間での進捗や取組などの情報共有と、優れた手法や課題研究事例の紹介を行い、担当者からの質問や要望に答えながら円滑な運営に努めた。課題研究支援スキームを活用した外部調査、外部連携等も活発に行われ、研究を深める一助となった。昨年度に引き続きオンライン研究日誌(OKN)を活用し、実験の方法やデータ、各種アンケートや今後の予定など、OKNに記入したものが

KCL

シングルポイントルーブリック

KCLへ集約された。1年次からの研究の記録を閲覧できるため、円滑な課題研究支援が実現された。また、年度末に実施していたシングルポイントルーブリックを用いた担当者との面談を年度途中に実施したことで、自己の成長、班での協働のあり方等の形成的評価をフィードバックし、担当者と生徒間で研究の方向性等についての共有を図ることができた。

## 11 今後の課題

文系分野の研究に取り組む班の外部連携の機会や、応募可能なコンテストが極めて少ないため、データサイエンス等を用いた文理融合の研究を増やしていくことが課題である。また、12月の3学科合同課題研究ポスター報告会で得たアドバイスを論文作成に反映させるだけでなく、3年次の研究に円滑に接続することも課題である。

# 事業名 グローバルリサーチII (GRII)

学科:英語科

学年:2学年

期間(日時):通年(月曜5、6限目)

担当者:川元、井上、アリソン、アレックス

## 1 目的

興味がある分野に関するグループでの課題研究を行い、それを英語のポスターにまとめることにより、その過程でSSH事業で育む資質・能力を育成する。

## 2 仮説との関係、期待される効果

課題発見力、研究遂行力、データ活用力、多面的思考力、科学的表現力、科学英語運用力の向上が期待できる。

## 3 昨年度(これまで)の課題

- (1)GR IIは GR I から引き継ぐ形になる。昨年度の GR I においては、グループ分けまではできたが、テーマ設定まではできなかった。
- (2)昨年度の GR II では科学英語運用力の S、A 評価が少なかった。

## 4 今年度の具体的目標

- (1)生徒の興味関心に基づき、グループごとのテーマを設定する中で「課題発見力」を育成する。
- (2)各グループで協働しながら「研究遂行力」「多面的思考力」を育成する。
- (3)理数科との協同プロジェクト(科学論文輪読)を通して「データ活用力」「多面的思考力」を育成する。
- (4)研究内容を英語でポスターにまとめることにより「科学的表現力」「科学英語運用力」を育成する。

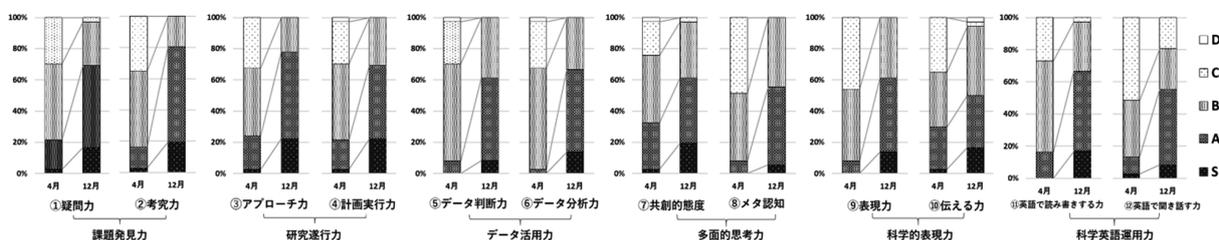
## 5 取り組みの内容・方法

- (1)「10年間計画」に基づいてGR IIの授業を実施する。
- (2)KUMAKITA TS法を活用し、グループテーマを設定。
- (3)熊本サイエンスコンソーシアムとの連携
- (4)シングルポイントループブリックによるグループ面談
- (5)理数科と合同授業「論文輪読」の実施
- (6)校内外でのプレゼンイベントへの参加の促進

## 6 育成する資質・能力および支援体制、評価・検証

内容	GR IIで育む資質・能力					
	課題発見力	研究遂行力	データ活用力	多面的思考力	科学的表現力	科学英語運用力
	◎	◎	○	◎	◎	◎
1学期 研究テーマ設定	◎	○	○	○	○	◎
2学期 グループリサーチ・中間発表・論文輪読	◎	◎	◎	◎	◎	◎
3学期 ポスター作成・クラス内発表	◎	○	○	○	◎	◎
支援体制	英語科職員2名、ALT2名の計4名で指導と評価を行う。					
評価検証	発表内容を支援職員で評価する。またループブリック評価およびデータ解析を元に資質能力への効果を分析検証する。					

## 7 取組の成果(第III期 KUMAKITA ループブリック評価)



## 8 考察

年度当初、興味関心が様々なメンバーがグループとなっていたため、テーマ決めに苦労したが、4名の教員と自主的に参加を希望する教員1名の計5名できめ細かな指導助言を行い、テーマが決まるとともに、よい集団となった。シングルポイントループブリック面談において、どのグループでも一人一人が個別の役割を担いながら探究活動を進めていることが分かり、これが「共創的態度」に結び付いた。また「科学英語運用力」が高まったことは、積極的に内外での発表を推進したことが要因として考えられる。発表本番に向けて緊張しながらも準備を進め、英語を使ってやり取りをするという経験そのものが生徒一人一人の「できる」実感を育てることができたと考えられる。

## 9 今後の課題

第Ⅲ期 KUMAKITA ルーブリック評価によると、すべての項目で伸長しているものの、研究の「仮説」や「主張」が明確でないグループもいくつかあった。グループ内で生徒それぞれの興味関心が異なり、全員の意見を盛り込もうとしているのが原因ではあるが、それを改善する指導の工夫が必要である。

## 10 年間計画

回	月日	講座概要	備考
1	5/12	オリエンテーション	事業説明・アンケート・ルーブリック・1年間の活動目標確認
2	5/19	先輩のプレゼンを聞く	先輩のプレゼンを聞いた後、テーマ設定
3	5/26	研究計画書作成	クエスチョンマッピング・先行研究調査方法
4	6/02	研究計画書作成	クエスチョンマッピング・研究対象の決定
5	6/09	研究計画書作成	研究計画書のプレゼン練習
6	6/16	研究計画合同発表会	研究計画発表会(理数科と合同)
7	6/30	研究計画書の改善	発表会での評価をもとに研究計画書を改善
8	7/07	夏休みの活動計画	夏休みの探究活動の役割分担
9	7/23	KSISF オンディマンドサイト	KSISF オンディマンドサイトにコメント
10	8/28	夏休みの活動集約	夏休みの探究活動をグループ内で共有・集約
11	9/01	ポスタープレゼン方法	ポスタープレゼンの原稿作成方法を学び、原稿を作成
12	9/10	ポスタープレゼン方法	abstract の作り方を学ぶ。原稿を完成させる。
13	9/17	ポスタープレゼン方法	ポスターと原稿を完成。プレゼン練習。
14	10/06	今後の研究計画	英語科合宿でのプレゼンでの助言を今後の計画に反映
15	10/15	グループ面談	シングルポイントルーブリック面談・研究計画面談
16	10/22	探究活動	アンケート分析・データの収集など・シングルポイントルーブリック面談
17	10/29	探究活動	アンケート分析・データの収集など・シングルポイントルーブリック面談
18	11/10	ポスターの構成の学習	ポスターの構成を確認し、ポスター作成
19	11/17	ポスター完成	12/8 の3学科合同発表会に向けてポスターを完成させる。
20	12/01	プレゼン練習	12/8 の3学科合同発表会に向けてプレゼンの練習。
21	12/08	全講座合同発表会	AR I ・UR II ・GR II 合同発表会
22	12/15	合同発表会振り返り	教員からフィードバック
23	12/22	冬休みの探究活動計画	冬休みの探究活動の役割分担
24	1/14	探究活動	冬休みの活動をグループで共有・集約
25	1/26	探究活動	修学旅行(シンガポール)での活動をグループで集約・ポスターを完成
26	3/16	講座内発表会	クラスでグループ毎に発表

# 事業名 アドバンスリサーチⅢ (ARⅢ)

学科:理数科

学年:3学年

期間(日時):通年(火曜3限目)

担当者:倉岡、内田、Alison Gaylord、Matthew Mitcham

## 1 目的

2年次のARⅡで取り組んだ課題研究の内容を、英語による研究論文としてまとめ、英語で発表することを目標に学習を進め、国際感覚豊かなグローバル人材としての語学力を身につける。

## 2 仮説との関係、期待される成果

データ活用力、多面的思考力、科学的表現力、科学英語運用力の向上が期待できる。

## 3 昨年度(これまで)の課題

昨年度から、2年次までに作成したポスターを翻訳するのではなく、英語で内容を再構成し、英語ポスターとしてまとめることで課題研究メソッドである KUMAKITA OP 法を実践している。ポスター作成については、前年度の GSS の時間も活用しながら作成したことにより、高いレベルで作成できるようになった。一方で、英語による発表においては自分の言葉で考えて伝える点において不十分なため、ポスター作成の段階から表現することを意識して準備をする必要がある。

## 4 今年度の具体的目標

研究内容について英語で再構成したポスターを一から作成し、発表箇所を分担して、全員が英語で発表する機会を複数回設ける。外部の様々な意見や評価を含めて研究の深化を進め、高校3年間の課題研究のゴール、集大成として発表会を位置づける。

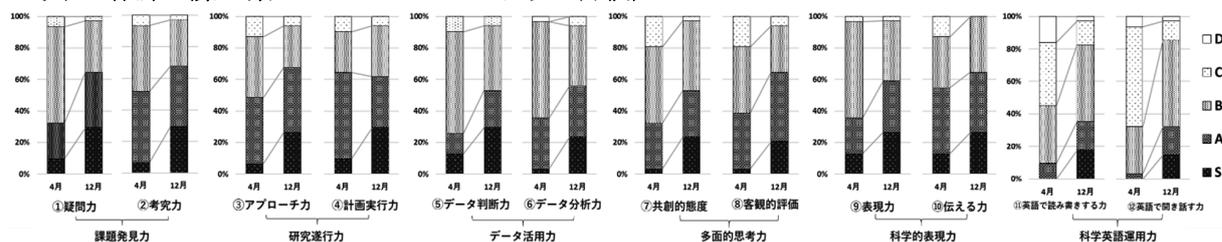
## 5 取組の内容・方法

前年度のARⅡの研究内容について英語のポスターを作成した。英語表現や発表については英語科職員、ALT、担任が指導を行った。英語科3年生と発表練習会を1回実施し、英語の表現方法や発音、発表の仕方等に関して助言をもらった。理数科1・2年生に向けて英語でポスター発表を行い、発表技術の向上を目指した。台湾の大学生との交流会に参加し、ポスター発表を英語で行った。「KSISF2025」においては、理数科3年生、英語科3年生、普通科3年生代表4班に加えて県内外のSSH校から15班が、海外から7班が英語による発表を行い、理数科と英語科の2年生が見学した。アドバイザーには県内ALT、大学院の留学生等35名を招き、審査していただいた。

## 6 育成する資質・能力及び支援体制、評価・検証

内容	ARⅢで育む資質・能力					
	課題発見力	研究遂行力	データ活用力	多面的思考力	科学的表現力	科学英語運用力
	○	○	◎	◎	◎	◎
1 学期	○	○	◎	◎	◎	◎
2 学期		○	◎	◎	◎	◎
3 学期			○	○	○	○
支援体制	ARⅡの研究グループ単位で実施。理数科3年生担任と英語科職員が研究支援を実施する。本校ALTから指導・助言を適宜受けられるよう、体制を整える。					
評価検証	論文及び英語ポスターをルーブリックによって評価する。この結果や、アンケートをもとに、語学力やコミュニケーション能力向上への効果を分析・検証する。					

## 7 取組の成果(第Ⅲ期 KUMAKITA ルーブリック評価)



課題発見力(①②)と多面的思考力(⑦⑧)でS段階評価に大きな伸びがみられた。また、科学英語運用力においてもS、A段階評価の生徒に大きな伸びがみられた。

## 8 考察

海外校との交流や「KSISF」への参加を通して、英語発表の実践的な機会を多く設けたことが、科学英語運用力の上昇につながったものと思われる。

## 9 今後の課題

2年次のGSSの時間を活用して英語のポスター作成に取り組むことを今後も継続して行い、質疑応答に向けた練習に十分な時間を確保する必要がある。来年度も、理数科・英語科・普通科全ての生徒に発表の場を設けたいと考えている。「KSISF」を本校課題研究の集大成として位置づけ、成果発表の場として確立するとともに、県内外を問わず他校代表も巻き込みながら拡大していきたい。

# 事業名 ユニバーサルリサーチⅢ (URⅢ)

学科:普通科

学年:3学年

期間(日時):通年(木曜4限目)

担当者:川口、竹浦、片岡、坂上、春木、荒木、宮嶋、國生、西村、秋吉

## 1 目的

2年次のユニバーサルリサーチⅡ (URⅡ) で取り組んだ課題研究の内容を英語による研究論文としてまとめ、英語で発表することを目標に学習を進め、国際感覚豊かなグローバル人材としての語学力を身につける。

## 2 仮説との関係、期待される成果

データ活用力、多面的思考力、科学的表現力、科学英語運用力の向上が期待できる。

## 3 昨年度(これまで)の課題

第Ⅲ期4年にあたり、URⅢは学校設定科目として2年目の実施となる。9講座に分かれて英語による研究論文作成を指導する仕組みや課題研究のメソッドである KUMAKITA OP 法の定着が課題となる。

## 4 今年度の具体的目標

研究内容について英語で再構築したポスターを一から作成し、発表箇所を分担して全員が英語で発表する機会を設ける。外部の様々な意見や評価を含めて研究の深化を進め、高校3年間の課題研究の集大成として校内発表会を位置づけ、英語による発表の達成による自己肯定感の向上を目指す。

## 5 取組の内容・方法

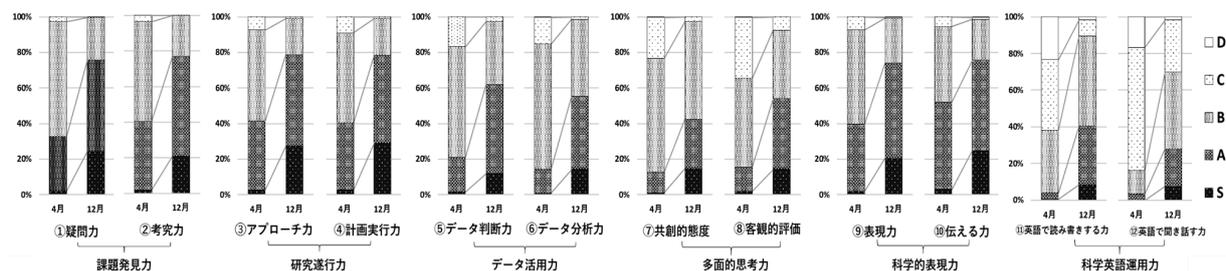
前年度のURⅡの研究内容を英語のポスターにまとめた。

- (1) 職員には初回オリエンテーションおよび毎週の学年会を通じて、生徒には初回オリエンテーションおよび Google クラウドルームを使用して、作成方法やスケジュール等の情報共有を徹底した。
- (2) URⅡ で作成した論文をもとに、可能な限り簡易な日本語を使用したポスターを作成させた。
- (3) 英語ポスター作成のツールとして、①Vocabulary シート (ポスター内各項目の専門用語や難解な語を5つ取り上げ、和訳をつけた語彙リストを生徒が作成するもの)、②フレーズ・語彙シート (英語論文で多用される表現をまとめた語彙リスト) を準備してポスター作成に活用した。
- (4) 作成したポスターをもとに、発表会では他講座の生徒を対象に英語による発表を実施し、英語科職員およびALT がルーブリックによって評価した。

## 6 育成する資質・能力及び支援体制、評価・検証

内容	URⅢで育む資質・能力					
	課題発見力	研究遂行力	データ活用力	多面的思考力	科学的表現力	科学英語運用力
	○	○	◎	◎	◎	◎
1 学期	○	○	◎	◎	◎	◎
2 学期		○	◎	◎	◎	◎
3 学期		○	◎	◎	◎	◎
支援体制	SSH 研究部職員が統括し、学年会等を利用して連絡事項の徹底、共有を図った。					
評価検証	論文及び英語ポスターをルーブリックによって評価する。この結果や、アンケートをもとに、語学力やコミュニケーション能力向上への効果を分析・検証する。					

## 7 取組の成果 (第Ⅲ期 KUMAKITA ルーブリック評価)



いずれの項目も C・D 段階の減少と S・A 段階の増加が見られ、科学英語運用力 (⑨⑩) はその傾向が顕著であった。昨年度も同様の傾向があったが、その変化量は昨年度よりも大きかった。

## 8 考察

実施2年目であり、KUMAKITA OP 法の細部が洗練され、定着が進んだため生徒の変容が大きかったと思われる。英語によるポスター作成やそれと同時に進めた Vocabulary シートの作成、班員で協力・分担して臨むプレゼンテーションにより、締めくくりの年度にふさわしい変容となったと思われる。

## 9 今後の課題

英語ポスター作成において、生成 AI を活用することも想定した指導方法を検討する必要がある。逆に発表の練習においては生成 AI を用いた班ごとの事前シミュレーションを行うなど、生成 AI との関わり方について学ぶ機会にもできると考えられる。

# 事業名 グローバルリサーチⅢ (GRⅢ)

学科:英語科

学年:3学年

期間(日時):通年(水曜4限目)

担当者:内田、Alison Gaylord、Matthew Mitcham

## 1 目的

2年次グローバルリサーチⅡ (GRⅡ) で取り組んだ課題研究の内容を練り上げ、英語ポスターにまとめ熊本北高校生徒国際科学フォーラム (以下、KSISF2025) にて英語で発表することを目標に研究を進める。また探究型教科横断授業も通して、語学力および国際感覚豊かなグローバル人材となる基礎を築く。

## 2 仮説との関係、期待される成果

データ活用力、多面的思考力、科学的表現力、科学英語運用力の向上が期待できる。

## 3 昨年度 (これまで) の課題

第Ⅲ期4年にあたり、GRⅢは学校設定科目として2年目の実施となる。昨年度の時点で研究テーマ設定後の情報収集でテーマについての更なる深化があった班が多く、英語ポスターの完成度が高くない状態で新年度を迎えた。プレゼンテーション時の質疑応答時の英語での臨機応変な対応力も改善が必要。

## 4 今年度の具体的目標

先行研究の調査に加え、アンケート・実地調査によりエビデンスを強化する。理数科の発表内容を把握し「英語教室」形式で合同プレ発表会を実施し、発表や質疑応答に対応できる英語力を向上させる。外部からの多角的な評価を研究の深化へ繋げ、高校3年間の探究の集大成として発表会を位置づける。

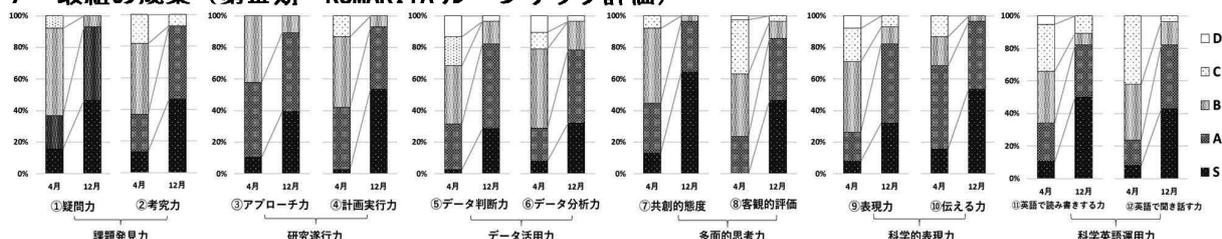
## 5 取組の内容・方法

前年度GRⅡの研究内容を練り上げ英語ポスターを作成した。英語科教員、ALT、担任の指導のもと、理数科生徒が指導を行った。理数科3年生の発表内容を理解して英語の指導をする「英語教室」形式の協働活動を導入した。英語科生徒は英語指導を担うことで科学専門用語の習得や発音の矯正に責任をもって取り組み、英語力と学習意欲の向上に繋がった。このことは発表会当日の英語質疑応答等にも良い影響があった。KSISF2025当日は36名の県内ALT、熊本大学大学院留学生等による質疑応答が行われた。また、2学期に探究型教科横断授業を3回行った。事前に科学ニュース、SDGs、社会問題等の時事問題を英語で学習しておくことが一助となり、科学的現象を英語で考え、理解することに繋がった。

## 6 育成する資質・能力及び支援体制、評価・検証

内容	GRⅢで育む資質・能力					
	課題発見力	研究遂行力	データ活用力	多面的思考力	科学的表現力	科学英語運用力
	○	○	◎	◎	◎	◎
1学期	○	○	◎	◎	◎	◎
2学期	◎	○	◎	◎	◎	◎
3学期			○	○	○	○
支援体制	GRⅡの研究グループ単位で実施。英語科3年生担任と英語科職員が研究支援を実施する。本校ALTから指導・助言を適宜受けられるよう、体制を整える。					
評価検証	英語ポスター作成および英語プレゼンテーションをルーブリックによって評価する。この結果やアンケートを元に、語学力やコミュニケーション能力向上への効果を分析・検証する。					

## 7 取組の成果 (第Ⅲ期 KUMAKITA ルーブリック評価)



すべての項目で1・2年次に比べ大きく伸びることができた。①全般的にSの伸びが大きい。②共感的態度の伸びが大きい。③疑問力のS、A層が大きく伸びた。

## 8 考察

7の①～③についての考察は次のとおりである。①GRⅢやKSISFでの準備・本番を経て実践的な英語力と自信を確立できた。②過去の国際交流で得た悔しさを糧に、今年度のKSISFでの成功を通じて課題を自信へと変えることができた。③探究型授業で事象を科学的に分析する面白さを知り、知的好奇心が刺激されたことで、主体的に追究する姿勢がより強まった。

## 9 今後の課題

生徒の3年間を振り返ると、知識蓄積が不十分なまま研究テーマを選択したことで、本来研究を深化・収束させるべき段階で興味関心が広がり探究の対象が多角化した。知的好奇心は更に高まったが、研究内容の集約に時間を要したものが多かった。今後1年次からの知識蓄積を確かなものにでき、より早くテーマの焦点化を図り、得意の英語を活かして更に一貫性のある探究を完結させることを模索していく。

# 事業名 データサイエンス (DS)

学科:理数科

学年:1 学年

期間(日時):通年(毎週金曜5・6 限目)

担当者:伊高・宮嶋

## 1 目的

課題研究を進める上で必要なデータ活用力を、実践や講義を通して体系的に学ぶ。また、情報に関する科学的な見方・考え方を働かせ、問題の発見・解決に向けて情報と情報技術を適切かつ効果的に活用し、情報社会に主体的に参画するための資質・能力を育成する。

## 2 仮説との関係、期待される成果

データ活用力が向上し、課題を発見する力や論理的に表現する力の育成が期待できる。

## 3 昨年度(これまで)の課題

理数科は、第Ⅱ期までデータサイエンスや情報機器、組込み機器について体系的に学ぶ機会が少なかった。

## 4 今年度の具体的目標

Chromebook の効果的な活用スキル、プログラミング能力、統計的な手法を習得し、次年度以降の課題研究で活用できるようにする。

## 5 取組の内容・方法

情報分野の理論的な部分や、Chromebook の活用法やプログラミング、統計的な手法について演習を通して指導する。特にプログラミングについては、一人一台端末を活用し、Google Colaboratory 上で利用可能なプログラミング言語 Python を用いて、機械学習の体験まで実施する。また、表計算ソフトによるシミュレーション、重回帰分析を行う。さらに、11～1月には外部講師を招き、IoT を駆使してデータロガーを作成して、実践的なプログラミング学習も行う。

## 6 育成する資質・能力及び支援体制、評価・検証

内容	DS で育む資質・能力					
	課題発見力	研究遂行力	データ活用力	多面的思考力	科学的表現力	科学英語運用力
1 学期	○		◎	○		
2 学期	◎	◎	◎	◎	◎	
3 学期			◎	○		
支援体制	SSH 研究部職員が統括し、数学、情報の教員が研究支援を実施する。企業や教育機関、研究機関の指導・助言を適宜受けられるようにする。					
評価検証	作品及びレポート、生徒の意識をルーブリックで評価する。この評価やアンケート結果の解析を基に、資質・能力の向上への効果を分析・検証する。					

## 7 取組の成果(SSH アンケートならびにKUMAKITA ルーブリック)

SSH アンケートの結果より、データサイエンスの授業において育成された資質・能力として最も多く選択されたのは「データ活用力」であった。また、「科学英語運用力」が2件選択された。自由記述から、約46%の生徒が外部講師による「データサイエンス実践講座」、約23%が「データ分析の授業」、約31%がその他の授業を挙げており、データサイエンスの教育活動の中でも特にこれらの学習機会が強く認識されていることが分かった(図1)。データサイエンス実践講座では、データロガーを活用した実習形式の学習を通して、データの分類・収集・整理・分析を行った。全3回の授業の内容と必要機器を表に示す。自由記述に対するテキストマイニングの結果(図2)、名詞では「データ、方法、プログラミング、活用、結果」の出現頻度が高く、動詞では「できる、使う、わかる、学ぶ、求める」が上位に見られた。データ分析の授業では、県内2地域のオープンデータを活用し、地産地消および地域創生に関する提案をペルソナ手法で検討し、班別発表を行った。自由記述のテキストマイニング結果(図3)では、名詞として「班、ペルソナ、プレゼン、データ、協力」が高頻度で出現し、動詞では「考える、作る、集める、できる」が上位に見られた。係り受け解析の結果(図4(a)(b))においても同様の傾向が確認された。さらに、ルーブリックの結果(図5)からも、データ活用力の⑤データ判断力、⑥データ分析力が向上するとともに、今年度は科学的表現力の⑨表現力、⑩伝える力の伸長が確認された。

データサイエンスの授業で育成された資質・能力に関する自由記述

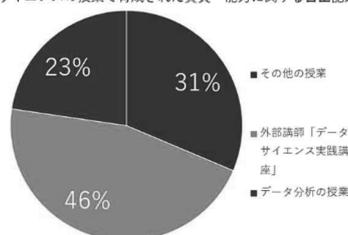


図1 授業で育成された資質・能力に関する自由記述

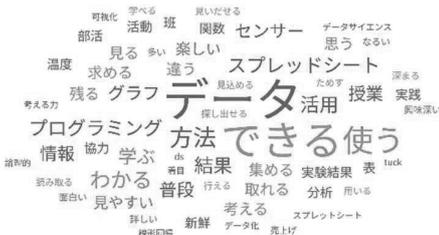


図2 テキストマイニング I

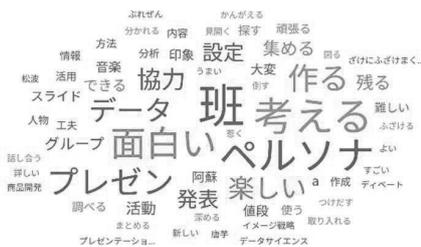


図3 テキストマイニングⅡ

名詞 - 動詞	名詞 - 名詞
データ - 集める	班 - 発表
印象 - 残る	データ - 分析
協力 - 集める	グループ - 協力
値段 - 考える	班 - 仲間

図4 (a)

(b)

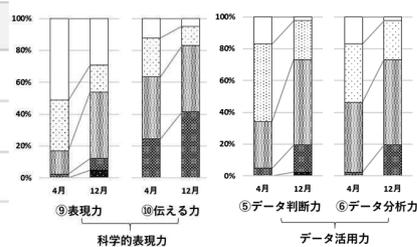


図5 ルーブリックの結果

## 8 考察

学期ごとにデータを用いて各班で考えをまとめ、発表する授業を実施したことにより、科学的表現力の表現力および伝える力が向上したと考えている。また、表計算ソフトとプログラミング言語の学習を演習形式で実施した上で、外部講師による実践的な講座を実施したことも、この高い評価の要因であるとも考えている。データサイエンス実践講座の自由記述に対するテキストマイニングの結果(図2)の出現傾向より、生徒がデータの取り扱い方法を理解し、活用可能であるとの認識を持った可能性が示唆される。データ分析の授業の自由記述に対するテキストマイニングの結果(図3)の出現傾向から、班活動を通じた協働的なデータ活用、分析結果に基づく思考、および提案作成活動が生徒の学習実感につながっていると考えられる。また、科学英語運用力が選択された背景には、海外在住者を想定したペルソナ設定や海外論文の引用といった活動が影響した可能性があり、生徒が国際的視点を取り入れて学習に取り組んだことが考えられる。さらに、授業の感想において探究活動への活用に言及する記述が見られたことから、データサイエンス学習が他教科や探究活動へ波及する可能性も示唆される。これらの結果より、外部講師による実践的活動と校内でのデータ分析授業の双方が、データ活用および科学的表現力の育成に有効であったことが示された。

## 9 課題

プログラミング指導やデータ分析の学習、外部講師による講座は教育効果が高い一方で、専門的かつ体系的に指導できる体制の維持が依然として課題である。特に、学習内容の高度化に伴い、生徒間の理解度の差が見られる場面もあり、基礎から発展まで対応できる教材の整理や指導方法の工夫が必要である。今後はこれまで研究開発した教材の精選や指導方法を精選・蓄積し、校外で共有可能な形に整理するとともに、大学や研究機関との連携を継続しながら、持続可能なデータサイエンス教育の実施体制を構築していく必要がある。



図6 外部講師によるデータロガー作成のための連続講座の様子 全3回

表 内容と必要機器について

	日時	内容	必要な機器
1	11/14	今持っていないデータを集める(データエンジニアリング)	マイコン(M5 Stack FIRE v2.7)、センサー(温湿度センサー、GROVE コネクタ)無線、データベース(Raspberry Pi)
2	12/12	今持っているデータから必要なデータを抽出(データクレンジング・データマイニング)	マイコン(M5 Stack FIRE v2.7)、センサー(温湿度センサー、GROVE コネクタ)無線、データベース(Raspberry Pi)
3	1/16	今持っているデータを分析し、結果を表現(データビジュアライゼーション) 今持っているデータの結果から、今後を予測(データマネジメント)	データベース(Google spreadsheet)、プログラミング環境(Google Colaboratory)

# 事業名 グローバルスタンダードサイエンス (GSS)

学科:理数科

学年:2学年

期間(日時):通年(火曜2限目)

担当者:川元、前田、川口、アリソン、アレックス

## 1 目的

英語での研究発表や、海外とのコミュニケーションを想定した科学英語とプレゼンテーションのスキルを高め、グローバル人材としての能力を身につける。科学分野を英語で学び、科学英語運用力を向上させるとともに、学際的な視点から知識を捉え、多面的思考力を向上させる。

## 2 仮説との関係、期待される成果

多面的思考力や科学英語運用力の向上が期待できる。

## 3 昨年度(これまで)の課題

他の資質能力と比較して、科学英語運用力はS、A段階生徒が少ない。また、英語で進められる授業が難しいという声もあった。今年度は、英語の教員、理科の教員も入りながら生徒の指導にあたった。

## 4 今年度の具体的目標

- (1) ALT による科学分野について実験等体験的な学習やアメリカのブレアウッズハイスクールとの共同研究を通して、科学分野における科学英語運用力を向上させる。また、学際的な視点から知識を捉え、論理的思考力や客観的な判断力を向上させる。
- (2) 研究内容を英語で発表する準備段階として、①英語科との協働授業に合わせて科学論文がどのように英語論文化されているかを理解する、②ポスターをパート毎に英語に直す等に取り組み、科学英語運用能力を向上させる。また、次年度開催予定の「KSISF2026」における発表に向けて、英語によるプレ発表会を実施し、語学力やコミュニケーション能力を向上させる。

## 5 取組の内容・方法

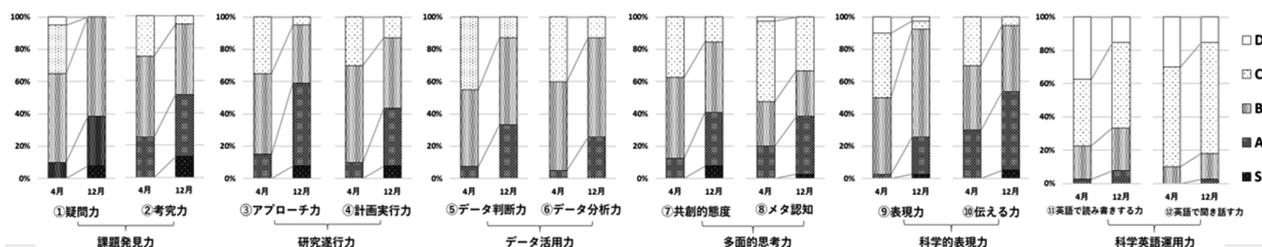
英語科と理科の職員、ALT がティームティーチングの形式で授業を実施した。ALT と担当が協力してオリジナルの教材を作成した。1学期は科学の様々な分野を実験や実験のシミュレーションサイトの利用を通して、化学・物理・生物分野の授業を行うと同時に、アメリカのブレアウッズハイスクールと「光害」をテーマに共同研究を行った。2学期は、英語科生徒と協働しての英語論文輪読、その後各自の研究における英語版ポスターの抄録である英語ミニポスター作成に取り組んだ。作成にあたっては、班員で分担して作成し、3学期末にはペアでミニポスター発表を行った。

## 6 育成する資質・能力及び支援体制、評価・検証

内容	GSSで育む資質・能力					
	課題発見力	研究遂行力	データ活用力	多面的思考力	科学的表現力	科学英語運用力
1学期 科学英語講座・実験(Waves、Leaves、pH等)				◎	○	◎
2学期 英語版ミニポスター作成・英語科協働授業				◎	◎	◎
3学期 英語版スライド作成準備				◎	◎	◎
支援体制	英語科職員1名、理科職員2名、ALT 2名のティームティーチング。ALT が中心に授業を進め、ほかの職員が生徒に必要な支援を行う。					
評価検証	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ポスター及びプレゼンテーションをルーブリックによって評価</li> <li>・英語でのインタビューテストを行いルーブリック評価</li> <li>・アンケートによる評価</li> </ul>					

## 7 取組の成果(第Ⅲ期 KUMAKITA ルーブリックでの評価)

重点育成項目である多面的思考力および科学英語運用力の自己評価ではどの項目でも上昇がみられた。特に多面的思考力、科学的思考力に関してはA評価が増え、S評価も出てきた。科学英語運用力については他項目同様伸びているが、S評価、A評価は少ない。



## 8 考察

共創的態度が伸びたことに関しては、グループワークを中心に授業を進めたこと、またブレアウズ高校と共同研究を行ったことが要因であると考えられる。科学英語運用力に関して、2学期からの課題研究の英語ポスター作成については、ポスターのパートごとの英訳と添削など、小さなステップを踏み、同時に科学英語に関する語彙も生徒に調べさせながら難しい科学英単語を増やすという手法を用いながら、生徒が使う科学英語表現を学んできたが、それらの英語を活用しながら、実際に口頭でやり取りできる段階までは至っていない。

## 9 年間計画

回	月日	講座内容
1	5/8	GSS Introduction
2	5/20	Acids and Bases
3	5/27	Acids and Bases Card Game
4	6/3	Light Pollution Collab. Project
5	6/10	Adaptive Radiation
6	6/17	Artificial Selection
7	7/1	Energy Day 1
8	7/8	Energy Day 2
9	7/15	Electricity
10	9/2	Waves
11	9/9	Sound
12	9/16	Aerodynamics
13	9/30	Momentum
14	10/7	Acids/Bases Experiment
15	10/21	Acceleration Graphs
16	10/27	Momentum (Egg Drop Project)
17	11/4	Banana Paper
18	11/11	Banana Paper
19	11/19	Introduction Writing (for Mini poster)
20	12/2	2-E Introduction Writing (for Mini poster)
21	12/9	Make Mini Poster
22	12/23	Chemistry Class
23	1/13	Poster Creation
24	1/20	Poster Creation
25	1/27	Poster Creation
26	2/17	Performance Test
27	3/3	Poster Creation
28	3/10	Finish Poster (no figures)

## 10 今後の課題

課題研究の英語ミニポスターは完成した。3学年でのKSISFでは英語でのプレゼン、質疑応答する必要がある。科学英語に関する表現や語彙は身につけているので、これからはそのような表現を使って、英語での口頭でのやり取りをする力をどのように高めていくか、研究していく必要がある。

# 事業名 科学系部活動の活動状況

学科:全学科

学年:全学年

期間(日時):通年

担当者:田尻

## 1 目的

高度な課題研究及び異学年間での研究プロセスの効果的継承に関する研究を実施する。研究で得られた探究の方法を蓄積し、一般化して汎用性を高め、他の SSH 事業への普及・啓発を図る。

## 2 期待される成果

学校全体の課題研究の質を高め、研究成果を国内外に広く発信する力の育成が期待できる。

## 3 取組の内容

令和7年	参加した生徒属性	発表会・コンテスト名	受賞名・活動内容	開催地
5/31	自然科学部生物分野	第98回日本細菌学会中・高校生研究発表セッション	参加	金沢市
7/26	自然科学部化学分野	2025年度(第15回)RENSセミナーSOJOコンペティション部門	銅賞	熊本市
7/27	自然科学部データサイエンス分野	WRO Japan2025 熊本予選会	参加	熊本市
8/6,7	自然科学部化学分野	令和7年度スーパーサイエンスハイスクール生徒研究発表会(SSF)	参加	神戸市
8/23,24	自然科学部化学分野	青少年の科学の祭典 熊本大会2025	参加	熊本市
10/25	自然科学部物理分野	令和7年度(2025年度)第76回熊本県高等学校生徒理科研究発表会サイエンスコンテスト2025 物理部門	部会長賞	熊本市
10/25	自然科学部化学分野	令和7年度(2025年度)第76回熊本県高等学校生徒理科研究発表会サイエンスコンテスト2025 化学部門	最優秀賞 九州大会出場	熊本市
10/25	自然科学部生物分野	令和7年度(2025年度)第76回熊本県高等学校生徒理科研究発表会サイエンスコンテスト2025 生物部門	優秀賞	熊本市
11/3	自然科学部化学分野	立命館高校主催「Japan Super Science Fair 2025」	参加	長岡京市
11/8	自然科学部生物分野	第8回グローバルサイエンティストアワード”夢の翼”	ソラシドエア賞	鹿児島市
11/26	自然科学部物理分野	令和7年度熊本県科学物展展示会(第85回科学展)	熊日ジュニア科学賞	熊本市
11/26	自然科学部生物分野	令和7年度熊本県科学物展展示会(第85回科学展)	優賞	熊本市
12月末日	自然科学部データサイエンス分野	第25回日本情報オリンピック予選	敢闘賞	
2/7,8	自然科学部化学分野	令和7年度九州高等学校生徒理科研究発表大会大分大会	優良賞	別府市
3/1	自然科学部物理分野	2025年度日本気象学会九州支部ジュニアセッション in 九州	参加予定	福岡市
3/20	自然科学部	九州工業大学中高生課題研究発表会	参加予定	北九州市

## 4 取組の成果

自然科学部部員数は36名(内女子部員11名)であり、理数科、普通科、英語科の全学科から入部している。現在、物理分野、化学分野、生物分野、地学分野、化学分野カードゲーム班、データサイエンス班に分かれて活動している。今年度、自主的に化学オリンピック熊本予選に6名、生物オリンピック、地学オリンピック熊本予選に各1名、日本情報オリンピック予選に1名が参加した。特筆することとして1年生が日本情報オリンピック予選で敢闘賞を受賞し、今後の成長が楽しみである。さらに自然科学部は科学教育の普及・啓発にも貢献し、青少年の科学の祭典にもワークショップの講師として参加した。

このように自然科学部が活発に活動した結果として、化学分野では県生徒理科研究発表会最優秀賞受賞、九州大会出場など活躍が顕著であった。物理分野でも県科学物展展示会熊日ジュニア科学賞受賞など活動が著しい。生物分野では、日本細菌学会中・高校生研究発表セッションでの発表など県外での研究発表大会にも参加した。さらに分野を超えた枠組みとして、データサイエンス班と化学分野のカードゲーム班の活動もしており、WRO Japan2025 熊本予選会への参加など多面的な活動の幅が広い。

自然科学部での様々な活動を通して探究の手法を学んだ生徒たちが、SSHの学校設定科目でもリーダーとなって着実に活躍する様子が随所にみられた。このような自然科学部の生徒たちは各SSHの学校設定科目でも牽引し、意識・態度面、技能面でも欠かせない存在になっている。加えて自然科学部の卒業生が後輩の指導に来校するなど活動の継続性が着実に広がった。

令和7年度自然科学部の部員数

	物理	化学	生物	地学	合計
部員数(内女子部員数)(人)	4(1)	23(8)	7(0)	2(2)	36(11)

自然科学部の部員数推移

SSH指定年度	経過措置	Ⅲ期1年	Ⅲ期2年	Ⅲ期3年	Ⅲ期4年
	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	令和7年度
部員数(人)	38	40	45	54	36

## 5 今後の課題

自然科学部の活動の活性化はもちろんのこと、今後も各分野の魅力向上と情報発信に努め、自然科学部の部員数を伸ばしたい。自然科学部はSSH事業を牽引するためのリーダー性を高める役割を担っており、これからも理数科だけでなく、普通科や英語科など他学科からも広く研究に興味を持つ生徒を募集し、生徒たちの興味・関心を高めて科学系部活動の活性化に努めたい。また、途中で入部する探究心を伸ばしたい生徒の受け皿となる部活動運営にも取り組みたい。